

巻頭言

国際経営研究所所長 石積 勝

「希望」という現代日本のキーワード

2017年後半、怒涛の政治ドラマの主役はやはり小池百合子氏率いる『希望の党』だった。この新党の立ち上げは首相の衆議員解散の決断を後押しし、それこそ無党派層の「希望の星」として快進撃をはじめかに見えた。しかし小池氏のあの「排除」発言をきっかけに見事に潮目が激変し、「希望の党」の前途は「絶望」的とも揶揄される。これが少なくとも2017年11月末の日本政治の状況だ。もっともここ2-3月間の政治ドラマを考えれば、もちろん、まだまだこの先、なにがあるかわからない。

小池氏はすでに2017年2月には「希望の党」という名称を商標登録し、一方では都知事選後すぐに小池政経塾「希望の塾」を運営してきたのだから、この「希望」というネーミングには相当のこだわりがあったのだろう。「希望」が時代の求めるキーワードだと直感するその政治センス、私はなかなかのものだと思う。安倍晋三首相も衆院の9月28日解散を表明した25日の記者会見で、「希望の党」について——選挙戦の行く末についてすでに好感触を得ていたからなのだろうか——余裕を見せ、「希望というのは、いい響きだ」とのべている。私もそう思った。もちろん小池氏がどの程度深い現状認識と構想をもって「希望」というキーワードを打ち出したのかもうひとつはつきりしないし、安倍首相については本当に、たんにその響き（サウンド）だけだったのかもしれない。だが「希望」は政治スローガンとしては前広で、しかも「日本新党」や「さきがけ」などよりは、もう一步、内容的価値に踏み込む言葉のように感じられる。つまり、私はこの「希望」というキャッチワード、小池氏が打ち出す前から、現代日本社会を論じる際の、あるいは現在の日本人の気分、渴望をすくい上げよう

とする際のキーワードとして、かなりの求心力を持つと感じていた。じつはしばらく前からそう感じていた。

もう10年以上前のことになる。ゼミで村上龍の『希望の国のエクソダス』という小説を読んだことがある。日本社会の現状に真正面から挑んだ硬派小説だった。日本社会の閉塞はいよいよピークを迎え、既存の教育の意味もシステムも、すでに空洞化していて、そんな中で一部中学生が始めた学校ボイコット運動は急激な広がりを見せる。既存の社会システムを死守しようとする大人たちを置き去りにしながら、彼らは直接、海外のメディアにネットで繋がり、味方につけ、全世界、全国民にメッセージを発信し続ける。ついにはこの数十万を越える不登校集団は国会や大メディアのハイジャックにも成功する。クライマックスは、その若き（中学生の）異議申し立て集団の代表——たしかくポンちゃん>といった——が全世界、全日本人々がネットを通じて見守る中で、日本国国会議事堂で大演説をぶつ場面だ。そのポンちゃんの演説のキメゼリフは次のようなものだ。

「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない。」

国際政治・経済の専門用語が飛び交う小説だけに、学生にはなかなか消化できない内容だったが、それでもこのクライマックス場面、ポンちゃんの国会演説のキメゼリフについては談論風発だったことを記憶している。このセリフに対して「わかる、わかる」という感じでゼミ生の間でも強い共感を得ていた。そんな私の体験もあったのだろう。今回の「希望」という党名に私のアンテナはすぐに反応した。

村上龍のこの本が出版されてからすでに17年。小池氏が小説を読んだかどうかは知らないが、この社会には依然として「希望」が欠落している。この間、世の中はますます内向き、縮小再生産で進み、やせ細る既存のマスメディア空間にとって替わる、展開力ある<建設的パブリック空間>も、いまだ生まれて

いない。日本社会の通奏低音であるくなるようになる>空気感が漂いまくっている。そんな中で多くの人々が感じているのだろう。そろそろ「希望」が登場しなければならないと。あるいはもっと根源的な「絶望」感が「希望」の登場の前には必要なかもしれないが、しかし、どう考えてもこの日本社会の停滞は長すぎる。日本には<諦観>という伝統があるなどという議論も、やはり一種のイデオロギーであると人々は気づきだしているのではないか。あの反乱中学生たちと同じように。日本人の<しかたがない病>（ウォルフレン）を乗り越えて、「前向きな未来志向型の欲望」ともいえるものを、もう一度喚起しなければならないだろうし、そこに「展望あるいはビジョン」を与えなければならないだろう。そんな気分が「希望」というスローガンを一瞬後押ししたのではないか。理想やら、理念やら、構想やらという青臭い営みの必然性が、今、われわれの眼の前に横たわっているのではないか。「希望の党」の絶望的展開にもかかわらずその必然性はやはりある。

さて今回の国際経営フォーラム28号には10篇が寄せられた。全体テーマとしては「理念と実践」とし、理論的な論文と同時に実践報告的な寄稿も念頭に、できる限り広く投稿者に間口を拡げたいと考えた次第である。これは国際経営研究所の基本的なスタンス、即ち実務的研究活動と、理論深化の両輪、あるいは統合という考え方をもちろん反映している。また私たちは私たちの研究活動が直接間接に経営学部の学部・大学院教育に大きく寄与できるものだと考えている。さらにはささやかなそれぞれの研究活動であったとしても、それらがなんらかの形で私たちの社会の希望へと少しでもつながるものでありたいと思う。寄稿して下さった皆さんに改めて感謝申し上げたい。